

峻巖清冽・田渕俊夫

八面六臂 鈴木五郎

術館と同時開催という異例のこととなつた。従つて切り口を変えたものでなければ、「技のひみつ」と題して、画材や技法、制作の過程に注目し、作家の秘密をさらけ出すとも言える展開に、専門の画家から一般の愛好家まで広くお客様に好評であつた。

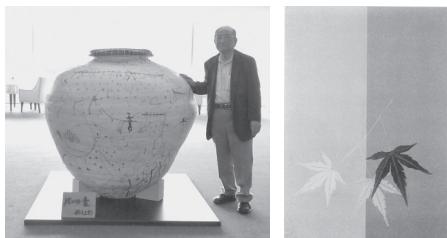
厳しく清らかな画境、線と余白を尊ぶ本来の日本画、そして水墨画へと、日本画の本道を歩む田渕俊夫。心ある日本画家達の師表となつてゐる。

現代作家を取り上げる初の、又彼にとつても最初の回顧展で、初期からの作品60点が展観された。第2回目は、美術館の開館15周年記念展として開催された。彼は兼々日本画家の目指す最後の境地は水墨にあると思っていたが、初めて本格的に水墨画に取り組んだ永平寺奉納襖絵24面、その発表をメインとする展観であつた。その時にはまた、メナード化粧品の初のアーティストフレグランスを発表するに当たり、彼に「緑映」と題して原画を描いて貰つた。絵も香水も日本らしい爽やかなイメージで、本場パリに於いて高級化粧品売上3週間連続第1位を勝ち得た。

続いて25周年記念展の最初を飾る展観が田渕俊夫展であった。此度は何と、名古屋市美

色々な椅子が一堂に並ぶ様は誠に壯觀である。実はこの二人の作家は同年であり、おふたりに共通するのは、絶えず挑戦を止めない所にある。メナード美術館には、之迄の二人の節目節目の記念すべき作品を所蔵する。田渕俊夫は永平寺のあと、鶴岡八幡宮、智積院と水墨を描く視点が広がつてゐた。鈴木五郎は、五利休と称する作品を発表する。千利休、古田織部が現代にあればかくあろうといふ境地を、五郎が実現するという次第。これからこのふたりから何が飛び出しか、その可能性の吐露されるのを期して待ちたい所である。

(メナード美術館顧問)



右：アーティストフレグランス「緑映」の原画(田渕俊夫)
左：青山リゾートのホテルにある大壺(鈴木五郎)と筆者

メナード美術館開館25周年記念
コレクション名作展 I
現代日本1950—2012
2013年2月17日まで開催